

レジリエンスが大学生の援助要請スタイルに与える影響

植田 健太郎・中地 展生

問題と目的

日常生活を送る中で個人が問題を抱え、それを自分自身の力で解決できない場合に、他者に援助を求めることがある。そのことを援助要請といい、DePaulo(1983)は、「個人が問題の解決の必要があり、もし他者が時間・労力・ある種の資源を費やしてくれるのなら問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」と定義している。援助要請を行うことは、精神的な健康を維持、増進させる重要な対処方略の1つである(青柳, 2016)とされている。しかし水野(2017)は、被援助志向性を高め援助要請の頻度を高めることで、援助者に依存する可能性を指摘している。このことから、最近の研究では援助要請の量のみではなく質、援助要請スタイルについての研究が発展しつつある(青柳, 2016; 永井, 2013)。

一方で、援助要請者は常にその立場に居続けるわけではなく、援助者となる場合もあるとして妹尾(2017)は、援助が上手い者は、他者に援助を求めることが上手くなると述べている。それに加え、鈴木(2006)は、レジリエンスが高い群は低い群に比べて、援助行動などの向社会的行動を負担に感じることなく多く行っていることを明らかにした。さらに、援助行動と被援助行動の間には正の関連性があることが明らかとなっている(高木・妹尾, 2006)。このように援助行動とレジリエンスの関係は示されているが、援助要請とレジリエンスとの関係について検討した研究は少ない。

また、レジリエンスと援助要請両方の要因に関係のある変数として、自尊心があげられる。Fisher, Nadler, & Whitcher-Alanga(1982)が提唱している自尊心脅威モデルによれば、援助要請を行うことで要請者の脆弱性や無能さのためと受け止められ、援助要請者の自尊心を傷つける可能性があると考えられる。それに加え脇本(2008)は、自尊心の不安定さに着目し、自尊心が安定している場合において、自尊心の高さは友人などの家族以外への援助要請の回数に正の影響を与えていることを明らかにしている。つまり、レジリエンスがあると自尊心が安定し、傷つくことを抑えることができると思われる。

そこで本研究では、大学生を対象として研究を行う。また本研究の目的は、レジリエンスが援助要請スタイルに影響を与えるモデルおよび自尊心を媒介変数としたモデルを想定し、そのモデル(Figure1)の適合度の検討及び、援助要請を促進させる方略について新たな知見を提供すること

を目的とする。

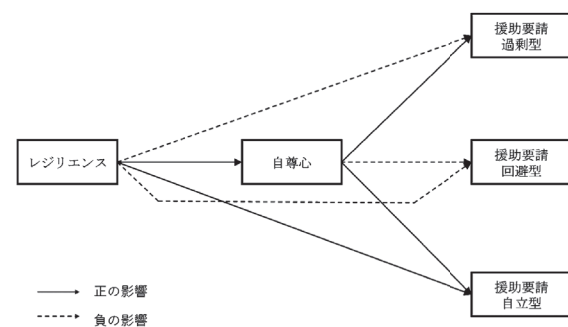


Figure1 本研究で検討する仮説モデル

方法

倫理的配慮

帝塚山大学の研究倫理委員会の承諾を得たうえで実施した。研究への協力は、研究対象者の意思を尊重し、協力をしない自由を保障した。

調査対象者

近畿圏の大学に通う大学生 238 名(男性 118 名, 女性 120 名, 平均年齢 19.37 歳, $SD=1.43$)を分析対象とした。

調査方法

大学における授業の一部を利用して、集団的に質問紙調査を行った。調査対象者に、質問紙を配付し、口頭および文書(質問紙表紙に記載)により研究の説明を行った。説明後、研究への参加に同意した対象者に質問紙への回答を求めた。回答終了後、研究代表者が回収を行った。

質問紙の構成

1).フェイスシート(性別, 年齢, 学年)の回答を求めた。2). 全 25 項目からなる齊藤・岡安(2012)の作成されたレジリエンス尺度を用いた。3). 山本・松井・山成(1982)が日本語に翻訳した自尊感情尺度を全 10 項目からなる日本語版自尊心尺度ものを用いた。4). 全 12 項目からなる永井(2013)が作成した援助要請スタイル尺度を用いた。

結果

大学生のレジリエンスが援助要請スタイルに影響するプロセスにおいて、自尊心を媒介することによって援助要請スタイルに影響を与える仮説モデルについて検討するために、共分散構造分析を行った。その際、パス係数の有意確率と各適合指標を参考にモデルの修正を行った。その結果仮説モデルの適合度が、良好な値を示したため(χ^2

(3)=1.464, *n.s.*, GFI=.998, AGFI=.988, CFI=1.000, RMSEA=.000), そのモデルを採択した(Figure2)。

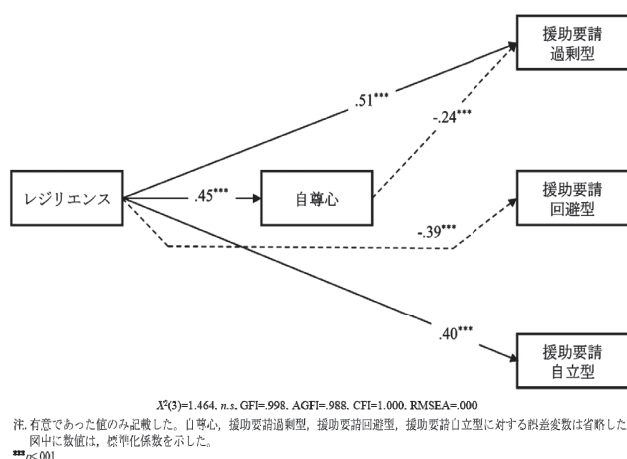


Figure 2 レジリエンスが自尊心を媒介して援助要請スタイルに与える影響

考察

共分散構造分析の結果より、レジリエンスが直接的に援助要請過剰型と援助要請自立型を促進させる一方で、援助要請回避型を抑制していることが示された。

松尾・前田(2015)は、看護学生からのインタビュー調査を行い、レジリエンスが高い者は積極的に他者と関わる積極性があることを示している。加えて、永井(2010)は悩みが家族や友人への援助要請を促進させることを明らかにしている。以上のことより、レジリエンスが高い場合、積極的に他者に対して援助要請を行うことによって問題解決を試みるため、援助要請過剰型を促進させる結果となったと考えられる。また、先行研究と同様にレジリエンスが自尊心に正の影響を与えていた。しかし、援助要請過剰型以外の援助要請スタイルへの影響は見られなかった。問題でも述べているように自尊心が安定している場合には、自尊心の高さが援助要請の回数に正の影響を与えることが示されている(脇本, 2008)。しかし、本研究では援助要請過剰型に対して負の影響がみられたため、自尊心が高い場合には援助要請を行いにくいことが示された。このことから、レジリエンスが自尊心を安定させる要因ではないと考えられる。

以上のことより、レジリエンスが援助要請の規定因であること、援助要請を促進させるためには、レジリエンスを成長させる必要があることが示唆された。

引用文献

青柳 実実 (2016). 大学生の信頼感と援助要請スタイル別ソーシャルサポートとの関連性 九州大学大学院人間環境学研究院紀要, 17, 63-68.

DePaulo, B. M. (1983). Perspective on Help Seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher(Eds.), *New Directions in Helping*. Vol. 2: *Help-seeking* (pp.3-12). New York: Academic Press.

Fisher, J.D., Nadler, A., & Whitcher-Alanga, S. (1982). Recipient reactions to aid. *Psychological Bulletin*, 91, 27-54.

松尾 綾・前田 由紀子 (2015). レジリエンスと問題解決に向けた行動特性との関連——看護大学生のインタビューからの比較検討—— 西南女学院大学紀要, 19, 27-36.

水野 治久 (2017). 援助要請・被援助志向性の研究と実践 水野治久(編) 援助要請と被援助志向性の心理学——困っていても助けを求められない人の理解と援助—— (pp.2-11) 金子書房

永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図——主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因—— 教育心理学研究, 58, 46-56.

永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成——縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—— 教育心理学研究, 61, 44-55.

齊藤 和貴・岡安 孝弘 (2012). 大学生のレジリエンスがストレス過程と自尊感情に及ぼす影響 健康心理学研究, 24, 33-41.

妹尾 香織 (2017). 援助要請行動と援助行動——助け上手は助けられ上手—— 水野治久(編) 援助要請と被援助志向性の心理学——困っていても助けを求められない人の理解と援助—— (pp.12-13) 金子書房

鈴木 有美 (2006). 大学生のレジリエンスと向社会的行動との関連——主観的ウェルビーイングを精神的健康の指標として—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 53, 29-36.

高木 修・妹尾 香織 (2006). 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性——行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究—— 関西大学社会学紀要, 38, 25-38.

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

脇本 竜太郎 (2008). 自尊心の高低と不安定さが被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.